

主催 自立生活センター 自立の魂 ～略して じりたま！～

障害者エンパワメントプロジェクト 2020

～東日本大震災と向き合えるインクルーシブ社会を目指して～



活動報告

目次

はじめに・・・1

総括・・・3

オンラインプログラム振り返り・・・6

宿泊プログラムIN YOKOHAMA振り返り報告
・・・11

宿泊プログラム参加者からのメッセージ・・・20

ボランティアメンバー皆さんの声・・・22

宿泊プログラム参加プロジェクトメンバーが
横浜で気づいたこと、感じたこと・・・23

はじめに

障害者エンパワメントプロジェクト2020 小野和佳

私が神奈川県で生活を始めて13年が経とうとしています。きっかけは東日本大震災でした。福島県いわき市出身の私はいわき自立生活センターで自立支援を受け自立生活をスタートさせて、その後スタッフとして活動をしてきました。活動についていくのが精いっぱいだった私が、自ら関わっていきたくと思ったのが、サテライト自立生活センター（以下、サテライトCIL）でした。サテライトCILでは東日本大震災による福島原発の事故を受け、今後県外での生活を検討したい障害者へ支援をおこないました。サテライトCIL活動終了後も私は神奈川県で生活を続けています。

サテライトCILの活動に貢献できなかったと感じていた私は、その後神奈川県内の自立生活センターや障害当事者団体と活動をする中で、たくさんの学びや出会いがありました。じりたまの皆さんとの出会いもその一つです。東日本大震災のことを、自分自身が風化させないように活動を続けていきたい私にとって、原発の在り方を懸念している磯部代表や、東日本大震災以降、防災への取り組みをさらに強化しているじりたまのみなさんと出会えたことはとてもおおく、さらには本プロジェクトメンバーとして活動することができました。

このプロジェクトの良さは、迷い続け、考え続け、ときに楽しむことも忘れずに。そんなところにあると思います。私自身、活動とはゴールが明確で結果がでなければNGという固定観念があり、賛成か反対かの結論を出さなければ活動できないのではという迷いもありました。ゴールと結果はとても大切です。ですがゴールに向うことや、何かの形をつくりあげるだけではない良さがこのプロジェクトにはあったと思います。

また、コロナ禍や遠方同士によるオンラインでの会議、クラウドファンディングや助成金申請へのチャレンジ、宿泊プログラムの検討など、本当の意味で障害者が主体となって準備や活動ができたと思います。そしてこのメンバーと迷い悩む時間を多くとりながら、宿泊プログラムを実現できたことを、嬉しく思います。

このような貴重な活動ができたのも、支援をしてくださった皆さまのおかげです。本当にありがとうございました。ここに活動報告書が完成いたしましたので、ぜひご覧ください。報告書のご感想をお待ちしております。そこからまた、新たな活動に繋がっていききたいと思います。



総括

2019年8月、『障害者エンパワメントプロジェクト2020（以下：プロジェクト）』が、本格的に話し合われてから5年の月日経った2024年9月30日から10月2日にかけて、無事にプロジェクトを実施することができました。

このプロジェクトの目的は、東日本大震災の被災障害当事者の方たちの保養と防災意識を高めるためのイベントを、宿泊を通じて2020年3月に『宿泊プログラム』を実施することでした。

しかし、ご承知のように「新型コロナウイルス（以下：コロナ）」の発生により、宿泊プログラムの延期が余儀なくされた。途中、プロジェクトの実施を諦めそうになったこともありましたが、参加メンバーとの結束力のおかげで実現することができました。

また、宿泊プログラムを延期している間、何もしないのではなく、参加メンバーみんなで知恵を出し合って、6回にわたる『オンラインプログラム』の実施もできました（オンラインプログラムの報告書はプロジェクトホームページに掲載）。

プロジェクトを成功させるには、資金と人集めでした。資金調達に関しては、オリジナルチャリティーTシャツを作成し、参加者各自が日々の活動の中で積極的に販売したり、寄付金を募る予定ででした。

人集めについては、事務局の方で知り合いのツテを最大限に活用しながらボランティアを集める予定でした。

その矢先に、予想していなかった未知の世界のコロナ禍が到来し、八方塞がりになってしまい、さらなる安心・安全なプロジェクト実施を痛感しました。立ち止まっていられないので、プロジェクトのホームページや知人などにメールでチャリティーTシャツの販売の周知コツコツと行い、地道に販売して行きました。

人集めにおいては、思うように集めることができず苦戦を強いられていました。特に福島県から参加するメンバーの介助者確保が困難を極めた。このままでは介助者不足によって参加を断念せざるを得ないメンバーが発生する事態になるところでした。

先の見えないコロナ禍の中、国は2023年5月にコロナを2類から5類へと引き下げ、その影響で無料で受けれたPCR検査が廃止されただけでなく、コロナ感染者数などコロナ全般の情報が少なくなっていました。その間にも、次々と変異していくコロナ、そして、特効薬がない状況で、安心・安全に宿泊プログラムを実施する自信が得られない状況になってしまいました。

同時に、チャリティーTシャツを購入してくれた方やお金を寄付していただいた方、応援している方々の思いを考えると、いつまでも延期することは難しいと考えていました。

2023年秋に、コロナの感染状況によっては緊急にプロジェクトを中止し、実施断念も視野に入れながら2024年の秋に宿泊プログラムを実施することを決定しました。

この時点で、資金調達や人集めの問題の目処は立っていませんでしたが、ベストを尽くして、その上で乗り越えられない問題が解決できなかったときは、宿泊プログラムを断念する覚悟で、ラストスパートで取り組みました。

資金調達に関しては、右も左も分からないクラウドファンディングを行うことによって、何とか解決することができました。

人集めに関しては、部分参加になった福島メンバーもいましたが、福島の介助者の方たちの協力があり、こちらも何とか宿泊プログラムを実施することができました。

その他に、宿泊プログラムを実施する上で大変だったのが、福島メンバーの宿泊先と宿泊3日目プログラムの会場探しでした。「バリアフリー」や「ユニバーサルデザイン」などの言葉は市民権を得たと感じますが、車椅子で生活していると社会や街が十分に整備されていないと実感します。

特に障害者が団体で、多数で、移動したり、行動することが想定されていないので、個人であれば、ある程度工夫できることでも、ユニバーサルではないことに気づきました。

例えば最近のホテルでは車椅子に対応した部屋が用意されていますが、1部屋しか用意されていないことがほとんどです。そうすると、車椅子対応の部屋が2部屋、3部屋必要な場合は、別のホテルで予約しないとならないということになります。仮に別のホテルで予約をしようとしても、宿泊費用が同じとは限りません。

会場においても、費用の問題もありますが、車椅子トイレは大丈夫か、視覚障害や聴覚障害の方に問題はないかなど、複数の視点からチェックする必要がありました。

宿泊先や会場の下調べは、事務局で丁寧に確認し選定しました。
反省点としては、コロナ禍の影響が大きいことは確かですが、それを除いたとしても、準備期間が充分でなかったことです。プロジェクトを発足する前に資金調達方法や人集めの方法を検討する余地があったと思います。

また残念ながら、介助者不足で参加できなかった福島メンバーや、5年という月日の中で、体調が大きく変わり参加できない福島メンバーがいたことです。
介助者不足の問題は、介助制度の問題と並行して、国レベルで解決して行く必要があると実感しました。ただ単に法律や制度を整備しただけでは、形にならないと思いました。形を作るには私たち障害当事者が自ら声をあげて、継続的な障害者運動を続けることが重要だと思いました。

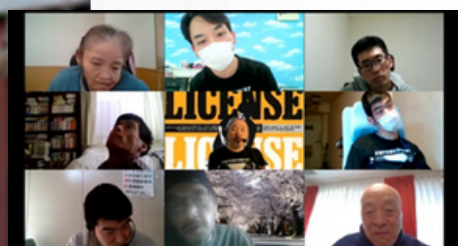
すべての課題を解決して、宿泊プログラムを実施できたわけではありませんが、参加した全員の結束力と、応援してくれた方たちのおかげで、新型コロナウイルスの感染者を出さずに、安心・安全な宿泊プログラムを実施することができました。

事務局一同、心より感謝申し上げます。

オンラインプログラム 振り返り

わたしたちはコロナ禍というこれまでに誰もが経験したことがない災害急の緊急事態に直面する中で、プロジェクトメンバーとして今だからこそできるエンパワメントの形を模索し、実践するためオンラインプログラムを定期的を開催し、顔を合わせ、対話を重ねる機会を作ってきました。

直接会うことのできない寂しさ、もどかしさと同時に、オンライン越しにでも相手の息づかい、笑顔や不安を確かめ合うことで、少しずつ相手のことを知り、距離が縮まる実感を持てたことは、オンラインプログラムを通じて何年も継続して向き合い続けてこられたからこそ成果であると感じています。



2024.9.11第12回オンラインプログラム



2024.3.22 第11回オンラインプログラム



2023.11.27 第10回オンラインプログラム

**3日目
プログラムの概要**

このプログラムでは……

- ①バリアとなるもの(ソフト・ハード)を撮影してください
- ②障害があっても楽しめたことを撮影してください
- ③可能な限り公共交通機関を利用してみてください

2023.7.10 第9回オンラインプログラム

2023.2.28 第8回オンラインプログラム

2022 8.5 第7回オンラインプログラム

2022.3.8 第6回 オンラインプログラム

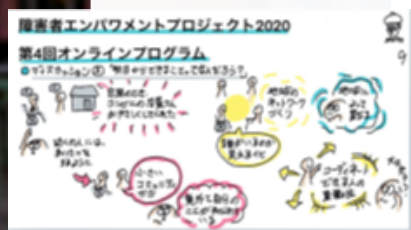
2021.12.16 第5回 オンラインプログラム]

2021.3.9 第4回オンラインプログラム

2020.12.25 第3回オンラインプログラム

2020.9.25 第2回オンラインプログラム

2020.6.29 第1回オンラインプログラム



第1回オンラインプログラム

テーマ：顔合わせ&宿泊プログラムスケジュールの説明

第一回のオンラインプログラムでは、それぞれが宿泊プログラムでほとんど初めて顔を合わせるはずだった福島と横浜の各メンバーがより親密にお互いを近く感じられるよう、趣味や自分の暮らす地域のふるさと自慢をひとりひとりの口からお話していただきながらなごやかな雰囲気ですり取りを進めていきました。

第2回オンラインプログラム

テーマ：みんなの想いを「見える化」することで
広がる世界とは

トークゲスト：山口翔太さん（トークグラフィッカー）

第二回目のオンラインプログラムでは、本来予定していた宿泊プログラムにもお招きする予定だったトークグラフィッカー®の山口翔太さんに、「みんなの想いを「見える化」することで広がる世界とは」と題し、トークグラフィックの魅力をお話いただきました。

第3回オンラインプログラム

テーマ：未来ではなく、今をともに生きるために
～相模原障害者殺傷事件から4年～

トークゲスト：杉浦 幹さん

第三回オンラインプログラムでは、2016年7月神奈川県で発生した相模原障害者殺傷事件を取り上げました。プログラムでは、まずこの事件に至るまでの経緯、そして裁判で何が語られたのかがまとめられたドキュメンタリー映画「生きるのに理由はあるの？ ～津久井やまゆり園事件が問いかけたものは…～」(企画・制作：澤文雄氏)を上映しました。

プログラムでは、まずこの事件に至るまでの経緯、そして裁判で何が語られたのかがまとめられたドキュメンタリー映画「生きるのに理由はあるの？ ～津久井やまゆり園事件が問いかけたものは…～」(企画・制作：澤文雄氏)を上映しました。

続いて、「津久井やまゆり園事件を考え続ける会」の一員として事件と向き合いつづけてきた杉浦幹さんより事件への思いを語っていただきました。事件を二度と繰り返さないため、まずは、半径5メートルの関係性から差別をなくすことだと、隣の人と語り合うこと。「他人ごと」ではなく「自分ごと」としてとらえなければいけないという言葉いただき、東日本大震災の風化に抗い、つながりを築くという私たちのプロジェクトの意義を再確認することができました

第4回オンラインプログラム

テーマ：東日本大震災から10年

トークゲスト：青田由幸さん（さぽーとセンターぴあ代表理事）

2021年3月は東日本大震災からちょうど10年。私たちは改めてあの震災と正面から向き合う企画を試みました。当日は私たちのプロジェクトをより多くの方に知っていただきたいという思いから、メンバー以外にも関心を持ってくださった災害支援、障害者支援に携わる専門家や学生など7名の方にもご参加いただきました。

第一部では福島県南相馬市にあるさぽーとセンターぴあの代表理事として障害者の支援にあたりながら、東日本大震災直後、取り残された被災障害者の安否確認をはじめ、避難生活やその後の生活支援を行ってきた青田由幸さんにご講演いただき、当時の被災体験や震災を教訓に進んだ地域の取り組みについて語っていただきました。

青田さんの講演後、第二部はグラレコ井戸端会議と銘打って、参加者のみなさんと全員で「今この瞬間に災害が起きたらどういった困りごとが生じるか？」をテーマに障害者、健常者様々な立場から意見を出し合いました。ディスカッションの様子はトークグラフィッカー山口さんの手によってグラフィックとしてレコーディング（記録）していただきました。

第5回オンラインプログラム

テーマ：自立生活と防災

トークゲスト：和田彩起子さん(自立生活センター富士)
三宅貴大さん(あいえるの会)

今、新たに自立生活に踏み出した若い障害当事者の声が聞きたい！というメンバーの意見から立ち上がった第5回オンラインプログラムの企画。当日は静岡県にある自立生活センター富士の当事者スタッフ和田彩起子さんと本プロジェクトメンバーの三宅貴大さんより、自身が自立生活を目指したきっかけや現在の生活で大変なことややりがいについて存分に語っていただきました。

第6回オンラインプログラム

テーマ：被災後の生活

トークゲスト：谷本恵子さん(NPO法人かながわ311
ネットワーク)

古市貴之さん(NPO法人シェルパ)

白石清春さん(あいえるの会)

東日本大震災から10年以上が経過した今も依然、様々な災害が頻発している日本列島。いつ災害に遭遇してもおかしくはない私たちが生き延びるため、そして被災後の生活を立て直すために必要なことは何かを考えるため、それぞれの立場で東日本大震災を経験し、生活の復興に携わってこられたNPO法人かながわ311ネットワーク専務理事谷本恵子さん、あいえるの会の理事長を務める白石清春さん、NPO法人シェルパ代表の古市貴之さんのお三方をお招きし、ご講演いただきました。

・ 2024.9.30～10.20 宿泊プログラム IN YOKOHAMA 振り返り報告



撮影：速水 諄一

障害者エンパワメントプロジェクト2020 宿泊プログラム1日目 報告

宿泊プログラムの1日目は、NPO法人 横浜シティガイド協会（以下：ガイド協会）のご協力を得て、みなとみらい地区から横浜中華街方面へ向けて散策を行いました。



ガイド協会は、横浜が大好きで隅々まで知り尽くしたハマっ子のガイドの方たちが、横浜市内を中心とした地域をガイドするNPO団体です。さまざまなガイドの企画を提供するだけでなく、利用者の要望を踏まえたガイドの依頼もご案内いただけます。今回は『横浜での関東大震災や戦争の歴史を巡る』をテーマにガイドをしていただきました。

横浜の中心地であり、観光地である横浜市中区には、何も意識せずに生活していると気づきませんが、関東大震災の遺構などが意外に残っています。



例えば2020年に新しく建設された横浜市役所の地下には、馬車道駅との連絡通路があります。その途中には関東大震災で隆起した実際の地層が展示されています。

横浜赤レンガ倉庫では、明治44年に作られたスプリンクラーの配管が、現在も残されていました（使用されていません）。また、赤レンガ倉庫は1号倉庫と2号倉庫がありますが、1号倉庫は関東大震災の影響で半壊し、2号倉庫より1号倉庫は短くなっています。

山下公園の場所は、もともと海でした。関東大震災で大量に発生したガレキなどを埋め立てできたのが山下公園です。

山下公園には『インド水塔』という水飲み場の遺構があります。関東大震災が発生した当時、横浜に在住していたインド人の方が28名亡くなられています。横浜市はインド商人をはじめ外国商人の救済措置を行いました。そのお礼として、1939年にインド商組合から寄贈された遺構だそうです。



私たちの横浜が、昔から国を越えて助け合いを行っていた証を目の前にし、誇らしさを感じるとともに、今も世界で災害が起きている現状に対して、国境を越えた人と人との助け合いは、どの時代でも大切だということを実感しました。

また、山下公園は1945年、第二次世界大戦の日本の降伏によりアメリカ軍に接收されていた時代もあります。

今では当たり前、誰でも自由に山下公園を行き来することができますが、接收されていた時代は自由に利用することはできなかったそうです。現代では想像もできないことです。

ちなみに山下公園の目の前には「ダグラス・マッカーサー」や「チャーリー・チャップリン」、「マリリン・モンロー」、「ベイ・ブルース」といった歴史上の人物が宿泊した『ホテルニューグランド』が当時のまま営業されています。ナポリタンやシーフードドリア、プリン・ア・ラ・モードの発祥のホテルでもあります。

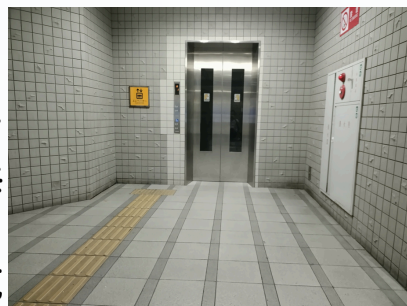
1日目の宿泊プログラムは、ガイド協会の皆様のおかげで、横浜に住んでいても目からウロコなお話が聞けて大成功でした！

ただ、午後からのプログラムだったので、体力的に優しい内容だと思っていましたが、予想以上に時間がかかってしまい、疲れ果ててそれぞれ帰路に就きました。2日目、3日目のプログラムがどうなるか、体力的に不安が残る始まりでした。



障害者エンパワメントプロジェクト2020宿泊プログラム2日目、この日もお天気に恵まれて日差しの当たる場所では10月としては暑いと感じるくらいのお散歩日和。初日は横浜シティガイド協会の語りに耳を傾けながらまちめぐりをするプログラムとなりましたが、2日目は自分たちの目や耳や肌感覚で横浜のまちを体感する、バリアフリーチェックまち歩きを行いました。

メンバーは宿泊地である桜木町のホテルから磯部チーム、岩切チームの二手に分かれて一斉に横浜駅目指して繰り出しました。今回、私たちはみなとみらい線馬車道駅発、そして横浜市営地下鉄桜木町駅発の2つのルートで横浜駅を目指しましたが、まず両チームのメンバーが漏れなく直面したのは、横浜という町の複雑怪奇さ。どちらの駅も地下にホームがあるのですが、出入口がいくつもあり、また中も入り組んでいるため、どの出入口にエレベーターがあり、どのルートがどこにつながっているのか、車いすの目線では非常に見通しがつきにくいのです。



車いすユーザーにとって外出の際エレベーターは欠かせない移動手段の一つです。横浜のおおよその駅や大きな施設ではエレベーターは当たり前にあるもの、というくらいに充実してきました（福島メンバーのみなさんからその点は素晴らしいとお褒めの言葉を頂きました）。

しかし、建物の構造はやはりもともと階段移動の動線を基本に設計されており、階段に比べエレベーターの台数は限られています。その上、階段を使えばスムーズに出られるエリアにたどり着くまでにエレベーターだと何機も乗り継いで、大回りしなくてはならず、倍くらいの時間がかかってしまうという現状も依然としてあります。どのエレベーターに乗れば最短ルートで自分が行きたい目的地に出られるのか、横浜駅のように非常に大きい空間だと一度選択肢を誤っただけで大いに時間と体力を浪費してしまう危険がいつも隣り合わせで存在しています。特に横浜駅の四方八方に伸びるルート

に慣れない人にとっては「行ってみなければその先に何があるかわからない」迷路のような空間です。



二手に分かれたグループはお昼頃にベイクォーターのテラスで待ち合わせ。ゴール地点は同じでも、乗り継いだエレベーターの数やかかった所要時間、飛び込んでくる景色や匂いまでそれぞれに全く違った横浜駅を体感した道のり。改めて横浜という町の大きさと入り組んだ複雑さを肌で実感した道中でした。それは今回、大勢の車いすの仲間とともに同じゴールを目指して練り歩くことができたからこそ、得ることのできた気づきです。

二手に分かれたグループはお昼頃にベイクォーターのテラスで待ち合わせ。ゴール地点は同じでも、乗り継いだエレベーターの数やかかった所要時間、飛び込んでくる景色や匂いまでそれぞれに全く違った横浜駅を体感した道のり。改めて横浜という町の大きさと入り組んだ複雑さを肌で実感した道中でした。それは今回、大勢の車いすの仲間とともに同じゴールを目指して練り歩くことができたからこそ、得ることのできた気づきです。

何気ない普段の道中でも正しい道を選ぶのに四苦八苦する横浜駅。もしこれが災害時ともなると、自分がどこにどうやって避難すれば安全な場所にたどり着くことができるのか、必ずや不安と混乱に陥ることになるでしょう。地元民はもちろんのこと、観光などで滞在している方々にとってはなおさらです。今回のまち歩きを通じて、緊急時の避難経路の案内の強化、そして、困ったときには「どこの」「だれに」声をかけたらよいのかなどが明確になるといった安心材料がより多くなれば、普段と災害時、地元民と観光客、障害者と健常者の境を超えて多くの人を優しく包む横浜駅が新たに生まれる、そんなイメージを持ちました。



お昼を食べた後はみんな揃ってJIRITAMA磯部のガイドの元、横浜駅周辺の名所を巡りながら徒歩で桜木町へ。到着後は横浜観光の古くからのシンボルである大観覧車「コスモクロック」、そして新たなシンボルとなりつつある都市型ロープウェイ「AIRCABIN」を福島のメンバーのみなさんに実際に乗車いただき、それぞれのアングルからみなとみらいの町全体を一望していただきました。コスモクロックやAIRCABINも含めて、横浜の観光施設は車いすでも利用できるように配慮がなされているところが多くあります。それは、やはり横浜が昔から外からやってくる人を迎える観光都市として自らのアイデンティティを築いてきた成果でもあるでしょう。一方で町の歩道は石畳が多く、すでにとろとろ剥がれかかっていたりして、大きな地震が起きた際、果たして車いすで移動することができるのか不安に感じるところもありました。横浜のいいところを生かしつつ、全ての人にとって居心地のよい町の未来像をより多くの人と語り合いたい！そんな気持ちが湧いてきた1日でした。



宿泊プログラム3日目インクルーシブ防災勉強会 報告

宿泊プログラム3日目は、インクルーシブ防災勉強会を開催しました。プロジェクトメンバーも含め24名の方々にご参加いただきました。初めてお会いできた方もおり、本当に嬉しく思います。ゲストに東京電力福島第一原子力発電所事故(東日本大震災)後、国内外の関係各所に取材を続けているおしどりマコ・ケンさん、トークグラフィッカー®の山口翔太さんをお招きしました。第1部では「知ることでは終わらない知りたがりになるために」という演題でマコ・ケンさんにご講演をいただきました。お二人が長年取材を続け積み重ねて来た情報を、たくさん聞かせていただきました。本プロジェクトは、今後の自立生活運動や障害当事者運動に活かすことを目的の一つとしていますが、そのことへの参考になるお話もたくさんしていただきました。

◆「戦い続けるコツはパーティーをたくさん開くこと」

マコ・ケンさんがドイツの再生エネルギー会社シェーナウ電力の社長に取材をした時、再生エネルギー実現の為に40年間戦い続けてこれた理由を聞いたところ、「長年大きいものと戦うコツはたくさんパーティーを開くこと。」とおっしゃったそうです。大きく何かを変えるためには、時間だけではなく持続力も必要です。3歩進んで2歩どころか5歩も10歩も下がってしまう日々でも、進んだその1歩をみんなで喜びあうことだそうです。

また、「正しいことだけを伝えようとしても伝わらない、楽しさの中で伝えていくこと」ともおっしゃっていたそうです。様々なイベントなどの中で少しでも時間をもらい、メッセージを発信しているそうです。このお話を聞いた時、楽しみながらということではなく、「自分達の声聞いてもらえるチャンスを逃してはいけないな。」と思いました。場をつくることでまわりにくみ取ってもらうのではなく、自分たちの声を発信する勇気も時には必要なのかもしれないかもしれません。

ドイツの学生向けに福島原発でおきていることを話した時、学生の皆さんは自ら予習をし、質疑応答の時間ではほぼ全員が手を挙げていたそうです。私達障害者は「私たちぬきに私たちのことを決めないで。」をスローガンに運動や活動をしています、そのことを伝えるためには、バリアの背景にあるものや、今日本で起きていることにもしっかり関心を持つことも大切だと思います。

◆誰もが参加できるグループディスカッションを目指して

第2部では、グループディスカッションを行いました。各自の災害時の困りごとを伝えあうこと、他の人の困りごとを想像することを大切にする時間を過ごしました。

発言しやすい雰囲気をつくるために発言の度にみんなですっかりリアクションをとり、傾聴を大切にするためにタイマーを活用、会場に足をはこべなかった方はオンラインで参加するなど、ディスカッションの内容だけではなく、進行方法についてもインクルーシブを目指した試みを行いました。また、ゲストにトークグラフィッカー®の山口翔太さんをお招きし、講演会やディスカッションの可視化をお願いしました。



講演会のグラフィックレコーディング



グループディスカッションのグラフィックレコーディング

◆たくさんの時間をとることの大切さ

事務局としての感想になりますが、多くの時間を取り余裕を持ちながら準備をすることの大切さを知りました。第1部の講演会では1時間弱質疑・応答とディスカッションの時間を取りました。マコ・ケンさんの進行もあり少しずつ質問者が増えていきました。第2部のディスカッションについてもゲストの皆さんに何度も打ち合わせにお付き合いいただいたことで進行の手法にたくさんのアイデアが生まれました。誰もが参加できるイベントを開催するには当然のことながら、しっかり時間をかけることの大切さを痛感しました。

最後になりましたが、ご参加いただきました皆さま、ゲストのマコ・ケンさん、トークグラフィッカー®の山口翔太さんに心より感謝申し上げます。

宿泊プログラムにご参加いただいた方々からのメッセージ

大震災があって、原発事故があって、何が起こったか知ること。様々な方々に降りかかったことを共有すること。そして今の自分たちにあてはめて、何が足りないか、何が困るか、共有すること。そしてそして！ 違いを伝え、違いを知り、想像力をはりめぐらせ、自己責任の荒野に誰一人置き去りにしないこと。それを今の私たちが楽しみながら備えること！

私は、楽しむことは怠けることじゃないかと思ってしまいがちなのですが、力を貯えるために楽しむこともこの勉強会で教わりました。グループディスカッションのときに、「待ってました！」と皆で声かけしながら話すのは皆が声を出しやすくなるし面白かったですね！グループディスカッションと、楽しいパーティを繰り返して、困りごとを減らす社会を作っていきたいとしみじみ思いました。

北村弥生さん



トークグラフィッカー®
山口翔太さん

おしどりマコ・ケンさん



東電の話は、まったく知らないことばかりだったので、大変、勉強になりました。わかりやすい語り口も、気をそらさずに引き付けて素晴らしかったと思いました。皆さんの心遣いが浸みわたって感じられました。

皆さん自身が得たこと、次に蓄積できることが、何だったのか、最終報告書を楽しみにしています

このたびは、プロジェクトに関わらせていただき、ありがとうございました！プロジェクトを通じて、私自身も「自分たちで考え、動き、発信する」という姿勢を改めて学ばせていただきました。皆さんが重ねてきた話し合いや想いが、グラフィックを通じて、振り返りや発信に役立ててもらえたら嬉しいです。プロジェクトに関わられた皆さん、本当にお疲れさまでした！

参加者の皆様よりいただいた声

グループに分かれての話し合いで、みんなが生きやすい世の中にするためには”動く”ことが大切だという意見が出た。それが楽しければ尚良いねと。それは小さなお祭り（パーティ）でもあるのではないか。

そして、「この防災勉強会は、正にその“楽しく世の中を動かす”を実行してるよね」と皆の意見が一致したことが心に残っている。

おしどりさんたちの面白くも理路整然とした話は、すごく説得力があった。マスメディアでは絶対に流されない真実を知ることができたと同時に自分から真実の情報を探し、考える大切さを学んだ。

参加者 Y さん

福島第一原子力発電所の原発問題を今もなお、取材をし続け、発信し続けていることに圧倒されました。テレビや新聞の報道の信頼度は下降してきていますが、報道されない事実は自分から取りにいかないとならないんだということを学び、と同時に、マコさんとケンさんが発信してくれていることに感謝しています。原発のことを忘れることはなくても、アクションするまでには至りませんが、「忘れていません、心を向けています。」という自分でありつづけたいし、活動し先頭を走っているマコさんとケンさんに出会えたことも、今回のインクルーシブ防災勉強会で得た大切なことでした。24時間全介助、吸引等の医療的ケアが必要で、言葉によるコミュニケーションも難しい息子がいます。今回、インクルーシブ防災ということで、一人ひとりちがう障がい、一人ひとりのちがう困りごとを学ぶことができました。障がいがある人、ない人との理解だけではなく、それぞれの様々な障がいを知るということは、とても大切だと思いました。自分の生活、身の回りのことで精一杯であったりもしますが、互いに知り合うことで、新たな気づきを得ることがあります、「いっしょ！いっしょ！」と共感することも多くあります。支え合いの出発点ですね。そして、自分以外の大切な人がいたら、その人の安否が心配です。

もう、本当にインクルーシブ・まるごとですね。

まず、自分にできることから、やっていこうと思います。

参加者 N さん

ボランティアメンバー皆さんの声

Qまち歩きに参加されて一番印象に残ったことは何ですか

・皆さんの前向きかつ建設的な意欲や意識が印象的でした

・震災の跡がきちんと語りつたえられていること

・車いすの人が集団で行動するのは容易ではないということ。特にEVが小さすぎることに。別の階から乗った健常者はEVの前で車いすの人が待っていたら、その階で降りて別の手段で移動することを考えるべき。EVはほかに手段がない人たち優先であることを、社会常識にしていく必要があると思います。

・横浜のベイエリアはほとんど埋め立て地なので、大きな地震が来た時の液状化や津波が怖いと思います。建物の高層階や地下にいて停電したら、車いすの人はどうなるんだろうと心配になりました。ビルに非常階段はあっても高層階から降りられるスロープは作れない。もっといろんなケースを想定して地域で話し合う必要がありますよね。

Q障害者が観光目的で来訪した際必要な配慮や、サービスについてのご希望やアイデア

・障害を持った方々に対して案内いただいた協会の方々の配慮は素晴らしいと思います。協会の方々が今後さらなる活動ができるように、彼らに対しても行政等の支援が必要かと思いました。

・アプリでの案内があるととってもわかりやすいのでは？

・横浜市ガイドの方も苦勞されていましたが、車いす対応トイレの確保と案内をする際の景色が車いす目線でもよく見えるポイントの事前確認が必要ですね。今回は車いすの方のことしか考えられませんでした。視覚障害の方などほかの障害を持つ方には異なる配慮が必要になってくると思います。

宿泊プログラム参加プロジェクトメンバーが 横浜で感じたこと気づいたこと

いい思い出！

- ・観光ガイドさんには詳しく説明して頂いて感謝しています。
- ・特に観光地である事もあり行けない所はほぼなくバリアフリーが進んでる印象でした。
- ・赤いくつは一いてたーおんなのこ〜♪という歌が口から出てくる様な光景なのに、いろんな災害や戦争に巻き込まれていた事が解りやすく説明されてとてもよかった。戦争や災害での人々の苦悩からの復興への光景が、現実の様な感じもしてならなかった。戦争を国家として主導して行う事が許されるなんて…。目の前にある光景はとても穏やかな海と港、人々の英知の融合によって発展し続ける『横浜』に目を見張るばかりでした。

改善が必要だと感じたこと

- ・どこの市町村でも同じ事が言えるが、段差が多すぎる。
横浜を歩いてみて思ったのは、『ここも同じだなあ〜、もちろん福島よりは良いけど…エレベーターの数が少ないのと、どこにあるのかわからずに探しまくるのは、日本国中、同じ』
- ・バリアフリー散策の歩道の石畳があまりにもガタガタする所が気になった
- ・車椅子用の観覧車が2台しかなく待ち時間があつたのは残念だった。
- ・ホテルの朝食のバイキングが、階段3段を降りる形で無理やり車いすごと下ろそうとした対応やバリアフリーになっていなかったこと

宿泊プログラム最終日 インクルーシブ防災勉強会
第一部「おしどりマコさん・ケンさん講演」の感想を教えてください

- ・漫才師であって新聞記者であるおふたりの講演は楽しくもあり、また切なくもありました。特に農家の方の行政は農産物の事は放射能汚染されているかどうかとても気にするのに自分達の事は誰も気にしてくれないという言葉は日本の全てにおいて言える事ではないでしょうか。
- ・マコ・ケンさん自体が毎月欠かさずに東京電力の会見に行っていること自体が凄い事なんじゃないかと思ったし、農家の被ばくについてなど知らない事も沢山話していただき凄く勉強になりました。
- ・とても貴重な講演でした。疑問を持つこと、その疑問を自分が納得いくまで調べたりする大切さも学びました。
- ・原発事故のいまや海外の電力事情をわかりやすく解説してくださいました。

第二部「グループディスカッション インクルーシブ防災を考えよう」
の感想を教えてください

- ・私達のグループで結論として普段からインクルーシブな地域であったら災害時も大丈夫だという結論がでたのが良かった。
- ・思っている以上に積極的にディスカッションに参加できてよかったと思います。いろいろな意見が聞けたしアイデアもなるほどなと思う事もあったので自分以外の意見を聞く事ができたのはとても貴重な経験になりました。ただ、自分のグループではタイマーを上手く活用することができなかったと思うのでそこは工夫が必要だなと思います。
- ・私は今まで、震災当時になかった事や原発事故に対する思いの薄さがあるのではないかと思います。あまり考えてきませんでしたがわかりやすく解説してくれた事により深く考えなきゃいけない問題だと感じました。

●障害者エンパワメントプロジェクト2020 WEB SITE



URL : <http://www.jiritama.jp/ivent/ivent202003.html>

●じりたまチャンネル (YouTube)



URL : <http://www.jiritama.jp/jirichan/movie.html>

●自立生活センター 自立の魂 ～略して じりたま！～



URL : <http://www.jiritama.jp/>







